



## 名古屋大学大学院医学系研究科 附属神経疾患・腫瘍分子医学研究センター 分子腫瘍学

鈴木 洋

2020年5月より名古屋大学大学院医学系研究科附属神経疾患・腫瘍分子医学研究センター分子腫瘍学を担当しております。研究室紹介の機会をいただき感謝申し上げます。

私は2004年に東京大学医学部医学科を卒業し、3年間の臨床研修（初期臨床研修および血液・腫瘍内科での研修）の後、分子病理学（宮園浩平教授）で大学院生としてマイクロRNAに関する研究を始めました。その後、2014年にマサチューセッツ工科大学（MIT）コークがん総合研究所のPhillip A. Sharp教授（Institute Professor, 1993年ノーベル生理学・医学賞）のもとに留学し、約6年間スーパーエンハンサー・転写制御・相分離といった分野の研究を行ってきました。今回着任した分子腫瘍学講座では、肺がんやマイクロRNAについて顕著な業績を多数あげられてきた高橋隆先生（現愛知県がんセンター総長）の後任となります。

私たちの研究室では、ゲノム・転写・RNAネットワークの関係性を多層的・定量的に解釈し、遺伝子制御の作動原理やがんなどの疾患のメカニズムを探索する幅広い研究を推進しています。これまでに、マイクロRNAの機能の非対称性を制御・予測するための数理モデルを含む基幹理論を構築し、スーパーエンハンサーによるRNAネットワークの制御などを明らかにしてきました。研究室の重要な方向性として、ゲノムやRNAの機能を数式やコンピューターで予測しテクノロジーで制御できるか、その予測からがんなどの病気の本質的な治療のシーズを見出せないか、という方向性を探求しています。

研究室を始めるにあたり、いろいろな目標がありますが、まず重要なことは集まってきたラボメンバーがよい研究をして飛躍することです。自分がこれまでの研究で大切にしてきたこととして、①外・外の世界に目を向けることの重要さ、②研究や学問（勉強）はとことんやらないといけないということを伝えています。①について、私たちが相手にするのは自然（Nature）という人間の知識の枠の外にある世界ですし、世界（World）もちろん相手にしています。上には上があるという世界で、しかし、どうやって誰も知らない自然に驚かされる瞬間を探求できるか。そ

のためには、私よりも専門家になって、メンバーがとことん自分の頭で考え続けること②が重要になってきます。外の世界と自分との間の往還の先に、新しい宝物に出会う万に一つのチャンス、そして、それが広く世界に共有されるチャンスが生まれるのではないかと考えています。このような環境を作るために、私ももう一度勉強し直そうと思っています。

着任して1年ほどが過ぎました。身一つトランク二つのような状況で帰国したにもかかわらず、神経疾患・腫瘍分子医学研究センターや医学系研究科の多くの先生方のご協力もあり、さまざまなラボメンバーが集合し、研究が軌道に乗ってきているところです。また、約1年前の着任は新型コロナウイルス感染症第一波の最中で多くの関係の皆様のお世話になりました。この場をお借りして、心より感謝申し上げます。今後とも一層のご指導ご鞭撻を賜りますよう謹んでお願い申し上げます。大学院生なども募集していますので、興味のある方は気軽にご連絡ください。

（連絡先：hisuzuki@med.nagoya-u.ac.jp, ラボHP：[https://www.med.nagoya-u.ac.jp/medical\\_J/laboratory/basic-med/oncology/mol-oncology/](https://www.med.nagoya-u.ac.jp/medical_J/laboratory/basic-med/oncology/mol-oncology/)）

